

紙花木槿

福山聖子

梅雨空のようにどんよりとした夏の日。空の色よりも輝いて、その家の花木槿は咲いていた。

仁木郎を見るのは三度目であった。

最初は人に案内され、西も東も分からないまま家の前へ連れてこられた。忽然と現われた洋館は、そこいらの空間をも求心してしまふ溜息と美しさを持っていた。

遊覧のまちなみを描きはじめて間もない頃で、初めて家の外に出た子どものようにすべての光景が刺激的であった。そして、近江の風土にすっかり馴染んでいる。「住まい」としての洋館があることに、意識を傾けた瞬間だった。

案内人に再び車中に促されて別のところへと出発したので、ほんの数秒の光景だった。一六ミリフィルムのひとつコマを切り離したように、その家の真正面の姿だけが網膜に焼きついて、周辺の風景は後日どうしても思い出せなかった。

二度めはまるで偶然の再会のようなだった。

甲南駅を降りて袖街道を歩くつもりが、目の前に洋館が現われた。

(ここにあったのか！)

大発見に心の中で手を打ちつつ、案内駅から近かったので、大袈裟な自分がおかしくなった。その日は光線の具合が悪く、スケッチするのをあきらめて先へ進んだ。

あそこならいつでも行けると思っていたら、どんどん日々が流れて、ある日、登録文化財になったという新聞記事を見つけた。

大正・昭和初期の建築物を描いてきたなかで、何

棟かは文化財登録された。傷みが気になって、早く登録されるといいなと願っていた建物が制定されると、肩の荷をひとつ下ろしたようにホッとした。

けれど今回は、なんだか先を越されたような複雑な気持ちになった。「仁木さんとこ、登録されたんやて。よかったな」と人に話しながら、登録前にスケッチしておかなかったのを後悔した。独特の生活臭が、文化財という消臭剤で匂わなくなってしまふ

んじゃないかが心配だったから。

袖街道のどこどころに残る古い家並みを見ながら、三度ここへやって来た。

花木槿の陰にひっそりと建つ洋館を見た。

(ああ、よかった！)

雨の匂いがするせいか、緑が勢いよく家を包みこんでいる。アルミサッシに替わった窓も、棕櫚の葉にほどよく見え隠れして好ましく思う。

若色を浮かべた玄関の円柱やモリタル壁が、この地で歳を重ねてきた慈味のようなものをにじませていた。

ここへ来る前、袖街道沿いの大原市場にある旧甲賀郵便局を見てきた。六年前にスケッチした時、ここがパパになったらおしゃれだろうなどと空想していたのに、何があったのか数年の間に、ひどく傷んでしまっていた。思いがけない変貌に見るのも哀しく、早々にその場を去った。

文化財登録されて変わるもの、変わらないもの。登録されずに朽ちてゆくもの。どこに岐れ道があるのだろう。

土地のお年寄が夕飯前の散歩に出てきた。

中二階の町家の前を通る。ぬっと天に突き出たスレンダーな切妻屋根の洋館の前も通る。目の前にあるのは文化財ではなく、日常の風景そのものだ。

星のような花木槿が静かな夕べに閉じてゆく。花木槿を真似て、私もスケッチ帖を閉じた。



旧甲賀郵便局 1993年



ふくやま・しょうこ
経畿美術短期大学洋画科卒業
朝日新聞「ふれあいネットフ
ーク」挿絵執筆中